豐山玉石集

四止

和書門
類
二八六六五號
八四函
八架
四册

內閣文庫
和書
類
二八六六五
號
四册
九二函
一四架

內閣文庫

番號	和 28665	
册數	4 (4)	
函號	192	279

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

豊山玉石集

四冊之内

四

国立公文書館
National Archives of Japan

一

祝者開帳并年中法會

養山大悲十一面尊八養山ヲ第ル平帳ヲ勅願

聖武皇帝養中山ヲ第ル平帳ヲ勅願

ヲ以テ王公の所冥帳ヲ

ヲ以テ王公ヲ以テ天正年中養国郡

山乃城主大和大納言英懐ヲ豊臣秀長公

養山ヲ伝作ヲ以テ大悲閣ヲ建立

ヲ廊楼門林新ヲ造営ヲ玉ひ

自然ヲ玉ひ法佛ハ養悲ヲ以利生ヲ施

玉ひ元生ハ伝今ヲ以寄ヲ養伝ヲ

さそんハ高ヲ以ハ冥帳ヲ大悲さそん

仏ヲ玉ひ玉ハさそんや延共一間浮彫の重像

容易ヲ冥帳ヲ玉ハ九ヲ今ヲ

後家伝八写くして預ふ所ハ黄金壱枚を
宝寿と称ケて毎年一七日の間寺ニ写経し
まして多宝の業ニ修縁を積し也
家先祖を祭ハ八月十五日
一七日間帳しまし其後も数度写帳せれ有
其黄金千分傳して寺中年預ニ五兵を書ム
観音写帳の如例ハ
年ニ数多有来慶三年任定良誉法印
薄鐘と作り光を添し吹てハ宝暦十
寅年ニ元二ニ成ル
写帳新限の事又写帳預ハ先代
写帳ニ写帳の法事を除ニ写帳ニ奉ル
寺後迫年ニして永ニ
百年の影ニ今世ニ写帳

すると写帳の時ハ新ニ供物宝寿を
備し代主僧ハ乃六時勤行出席ニ
法会行ル 当限法の振後の後写帳す
礼堂の正面ニ差ニ殿 殿を置て 仏せ
ニ写帳預て 仏礼米壱の三ツを頂か
ニ写帳の時ハ方丈六時より勤代
堂ニ出て法事と勤先後隆の時中年
帳を預ニ写ル ニ也孫孫ニ教儀
式ニ毎年宝写帳の日別紙ニ写ハ寺僧の
業をして其時命ニ
先ハ人ニ為ル写帳を為ハ

毎年四月元日奉為 聖朝安穏宝祚翼

回　大神殿下武運長久風雨順時人法繁
栄や宮の刹より集会今の渡りと接法会を始む
実修道俗禮拝より光満し真言唱仏とり
ちれと云ふ目を放さず今やと待ち
拝人の心もかるるの年の始のさきより横
雲たちたく黎明より御帳御部しまれハ
策杖黄金の長身より見切切位の紫ひ色服装
流れの咲と合ス顕れ出ル玉ふ玉ふ玉の光
りもいや増り神天照神の真昔岩戸を開き
御覧しあるおかしく給やとの玉ひし神代も
かくやとおもはれて其殊勝なるも何ハあれ
と今朝まるるるハ

一

毎年正月十四日晩法隆より陸奥命を勤む
御参詣四体薬師仏弘法大師天王親く
真義大師へ授與し玉ふ此宝殿陳設
（是ハ御秘蔵）木を檀上安し玉ふ十一面秘法観
檀の護摩木法要鄭重なり御修行
竹古峯山乾有の幽谷（鈴白山社を真言）小雲見住て
黄昏方の見を必ず雲見出て人を惑す
為と古より尋常ハ黄昏の見を吹て
唱一夢醒れと今夜三至て陸奥の法力双
従雲見を辟除し従界する実を表し見
を吹くと方時ハ雲見面を作る者相時を
振て出法力験験ハ方ハ光を加ふし内陳外陳
進巡るとも三度迄次ハ化主道俗大徳より徳道

上ノ〻拵與一郎左衛門宗宣印をかゝし（修学院御領金之ヶ原）
法華の修ゝ人員して日月大菩薩を勧請天照
太神吉日明神五帝を京師より天地四方
天子將軍次ゝ征夷大將軍次ゝ京師次ゝ
四方諸侯次ゝ四方の表ゝ出て事情の法人
ゝ敷ゝ〻む学徒道俗遠近より群り集て滝
を潜肩ゝ牢て拳て是を頂ク人と桃と金ク
孔宣孫愛又和ゝ修ゝ法ゝ是陸ゝの加持の威
力ゝ依て災禍を除き幸福を授ク人ゝ為ゝ
世俗学を進ゝ

閻浮檀金之事

天竺雪山の南大雪山の北ゝ阿耨達池ゝ中ゝ
ゝ

力ゝ以て庭園の体ゝ成ハ世尊ゝ説給ふ池六所
ゝ中ゝ殊れハ四ゝ百四十方ゝ在ル大雪山ゝ北天
竺の界相蔵国の東南ゝ方ゝ山ゝ入ゝ在ル阿耨達池
ハ南閻浮列の正中ゝして金銀瑠璃頗梨乃
四宝其岸ゝ飾ゝ底ゝ八金砂ゝ布き清き波
金ゝ如ク流レ底ゝ徹て探位の美麗欲力
大龍王ゝ棲ゝ池の中ゝ沈ゝ五ゝ九ゝ清吟
ハ徳水ゝ出して閻浮列ゝ潤し豊ゝ池の
東ハ西ハ銀牛の口ゝ象恒河ゝ流出し池ゝ
遶ること一匝して西南の海ゝ入ル池の西面ハ瑠璃
馬の口ゝ似て縛蔔河ゝ流出して池ゝ遶ること
一匝して西北の海ゝ入ル池の北面ハ頗梨獅子の口ゝ
似て恒河ゝ流出して池ゝ遶ること一匝して東

和の海に入り此地の例に大樹王と閻浮樹と
申候樹の圓七田句高百田句四方に枝葉さし
てひさしの事一五十田句天竺の一田句こゝハ唐土の六
町に當る積れハ十六里を一田句と申候樹の果其
大きさ八石のりさしのめくらと申候地中の底
に沸り出候金銀ハ中に樹王と申候其果の汁物に
點じて金に成り申候其果の汁阿耨達池より
流出る四方の河に流れ出るゆへに石を焼て金
に成し候也 縁て閻浮檀金と申候金ハ樹に
よりて名つけ申候須弥南畔の万國を流れて
南閻浮洲と申候ハ此閻浮大樹王によりて名
つけ候閻浮檀金ハ世界黄金の最上に成て
其色赤黄に成て更に紫真珠を帯し候後金

中に成候河耨達池ハ法天神仏の遊宮に成候ハ
至て親く地中の後金ハ神通の人にて採り
得候也不叶候然右地の四方より阿流れ
出て真流の末にて得候金を閻浮
檀金と申候真珠に閻浮檀金の佛也と申
候後金に清き事に成閻浮檀金の光
像右之類や
右閻浮檀金之事天明四辰年五月十日社家
井上河内守殿方御尋ニ答書写出事
毎年四月八日流佛佛會
礼紀年紀云 五十八 四月八日 天皇徴諸王諸卿
行灌佛會三輪大神請日天下人意情不善行支

無道則疫神得便而放熱病噉精氣為天中
天聖中聖之真仙至仙四月八日産於西極國天
竜棒産湯如今也移行其會象於吾國則人
離人作而趣異外大道以其妙湯灑縣逆則疫
神退去無国災其象云云於正安殿造山形ヲ按
佛誕狀作木花草花菜本屋簾ヲ安案於光
上盛五香之五水於五色之五鉢以五色綵結衆花
而敷布施於花房以金銅作五寸六分釋迦像而
立金鉢之中前設一大鉢衆僧修法了天皇
親汲合五鉢之五水於一鉢致敬格信而三灌
佛作禮下而去佛前次諸君隨品拝灌佛ホ
ヒ以下朝薄仏会の儀典其意をなすもの
ゝ見む及ちるゝ五家七道法国泡ひ別て

干今是會を沒ゝ古ゝ其由て尋ねをを
ちゝぶんて世下り人慢ゝて是を忽ゝせんこと
を思れて是を惡しゝするのを

六月十八日蓮花會觀音堂の西南二百餘步ゝ
一の峯有蓮花華山と名つゝ其下の谷を蓮
花谷とゝふ此處ゝ往古ゝ大海の方池あゝ
稱ゝの靈妖有しも靈驗ゝ新ゝ成ゝ
天平五年五月九日觀音堂供養法了同六月
十八日の晨彼峯ゝ紫雲ゝ音楽ゝと奏ゝ仙
道ゝ人奇て往て見ゝ紫の雲
覆ゝ彼ゝ人ゝ九ハ二人の天童ゝ蓮花を持
て池水ゝ投ゝ金瓶ゝ水を入蓮ゝ上の紫雲

より返入て法天と号す紀氏寺の寺より音楽
を奏し蓮花を散し良久しく大聖人と
供養し奉り戸ゝ家ゝ天より降れり四見
する所と已に九ヶ年を経たり故に年毎九月
十八遠近貴賤道俗肩を磨り踵
を踏て寺に集り親しく天人渇仰の儀を
拝見し奉り行基菩薩随喜乃所
聖武帝に奏し勅願にして同十三年六月
十八日蓮花供養と称し毎年不退の大会
を修し給ひ其日も法天の供養例の
如くなるに法人いつくにか伝へ奉り
極楽往生を願ひ奉り悦び有
ける所八十余の男女の尼僧三堂の蓮華を

宝前に捧げ行基菩薩涙を流す八幡宮
当郡郡村の地の主神に東に依て
蛇身を受毎日三熟の苦に堪ず
んば欠乏地に蓮を植れ
大聖を供養し奉
天に生れん仮に此地の故永く寺を施
入し向後此地の蓮を取て大聖を供養し奉る
其の報を所望し給ひ忽然として失ぬ
其の翌年十八日例のごとく管弦音楽天花と
供養して其中に吉人の天告して曰く我は当郡の
地の主なり大聖を供養し奉る故に蛇身
を捨て今天に生れり法に寄て仏果を
得しと法人是を聞て伝人骨遺に徴し

拳て九霄を望む数仞の外かくて天平乃
末迄も重陽の日ハ天人と共に遊ぶ
さく蓮花谷の地ハ法天花を散し樂を奏す
ハ彩を写し給れハ法人地の四方ハ拜集して
其彩を相しるし世下り人揚る故ハ今ハ
彼水ハ流つる彩を学ん様するもあるべし
然者令武八年と為ハ仏神寄附の地の
蓮を取て供養す而其里の右左地の境を
爭して蓮花を供するを停めらるる元
古尾の寺ハ法天地の所をあらて里の内ハ
置とゝ云ハ為ハ里の内果して人馬
疫疫を去る為ハ樹花する者多かしかハ願を
願ハ遠令しして長く青山ハ参詣せむ

加ハ拜殿有いまゝの令武ハ奉ハ
とき人の心月清ちれハ天人の音樂を
はすると雖も宜之部記何の所ハ始め
久今八年三月日樹示をして粧飾の宝殿を
奏し大悲寺と供養す行道記ニ見仏告天人
下り来と奏せし儀相ハ擬し佳をし昔の
夏を去る揚れる今の人の伝を聞る方位
を為ハ仏笑擬しの能ちと
いふハ法ちる只ふハ天人彩向して大重
と供養ちるとしハ今心昔ハ加ちる度かる
仏永保元年の賢職在しして天こと
不能のこと五六年ハ何くの者ハ九日
一首の歌を徴ハ書記れ半の程ハ張年置ん

初瀬山の蓮花今よ盛て作り昔しのことも思
出てくもりなる目さめて又絵今も絶せざる
業の事とかくとかくの人の作り家ん
月人よりを彼蓮花谷の池といふ所今の御
堂殿おの池ちかくに建て樣々昊揚の中
万勅の三堂出来しむひしかハ昔より池造
石極楽を置て毎夕燈を挑き供養す近
年の夏ゝよ此池より出を拔ひろ来儀
是後篇に著るさまかてくりとして
所いろ〳〵ゝ

或人問云樂ハ人間たるれの音楽なる事門
咸池の音乃ち此すなわち況天樂をや今

是を大忠者の所為およ奏す何のいそれかあらん
答云雅楽ハ神楽の名也迷ふて是を已調俚曲
樂歌牧笛の類ちかくと思ふ名の由緒を
たゞすれハたゞ是雅楽ハ神代の神楽を模
して

聖徳皇太子の製也ふ慶神
時の祥と賞しふ所以なり神楽ハ神道
の至て大事とする慶神人代昊よりて曲
調神変すといへとも鬼神の惑迷也ふ
ゆへ聖ゝ者ゝ故ゝ

聖皇古紀下云推古
天皇九年太子奏して曰人倫ノ法ハ礼楽ノミ而
已故ニ於神代也八百万神集ニ於高天ニ議製祭礼並
製神楽雖有礼節尋無楽和則不立人度今已
立人倫礼理呂異聖樂和昔国民仍呂百濟樂

人奏之兆民咏耳仍率秦大連依猿女君樂於
神樂五直加手舞足蹈典改弟鼓兄鼓搖鳥
指調加左ト調造六十六番面三十三番謠舞
元猿女君傳号之猿樂奏之鬼神和睦人民
悉和樂于時住吉大神託巫曰謠舞者吾休也
這伎合吾国風宜祭祀奏之願於汝伎端先
容吾三神吾高貴化王菩薩也更名如幢菩薩
也我三神分耳在于天ト地ト海ト在天高皇産灵
尊在地大己貴大神在海彦波瀲武尊別ヲ別
神本我也皇太子ハ当知速奏聖大王皇太子聞
之皇造三番之面製実狂三番伎一面白翁是中
於天二面内色是中於人三面黒翁是中於地
伎成奏神前仍四海平穏万姓皆康乐暑抄

こゝ以て是をもつて古の風先ハ三番の喫ハ
鳥を住吉明神を容ーをなすあるいをきこと
なるべしや又ハ人ハ今也猿楽の事
なる伎乗の人今ハ至ては遠流を徐し
数ものを動むしいふ宮ものあるを
是朝の重乗といふとも此ふ原のした京神国
の奇妙ハ云の乃ふ所にあるまた此中ハ猿女の
君といふハ天鈿女命の末なり細女ノ命ハ天神古記ホ五
日ノ編照太神ノ勅を受て神楽の道を行ふ
猿女君ハ其裔なれハ此神楽を行ふ
祁乗の古を変て猿楽とハ名つけ
もつなり鈿女もけものの猿乗猿ハ名つけ
加ふて異妙の伎と云ふハ大きなる誤りのこと

ちゝ人なるべき事なり神明已上を高賀
茂一社（い大悪者何ぞ納受し給へるやの
上なる歟一天と人と共に大悪者及
合山の法神照覚し給て貴き給ふ事ハ天平
のむかし天人降りて奏せし今仮薬の人
奏するも矣ちる歟ちうしたるのちゝ人古代の
中ゝ国初天照大神八万万神を率ひ青山に籠て
卍人の神宋男八人の八乙女と共に神宋の家を
奏ぐ一説に云ふ天地有始の時青山の侯号を神
聖侯と称すと云ふ今様薬を供養す宋代
神代の故事ゝ叶（り況又ゝ実徳王菩ハ帝
法勅宋ゝ青山帝釈率天上観世音侯
ちゝとゝいふハ衆生を救ひ給ふ神（先ゝ尋ねハ
鞍ゝ馬ゝ人都率天ハ法勅菩ゝ薩の住
法勅菩ゝ薩帝住吉大明神と住吉宮を
又青山ゝ法花ゝ山（り熊野ノ大方ノ様宋ハ天ゝ住吉
明神の宮奏ゝ玉ふとゝ云ふのミなる
法帝の三番供ハ帝住吉三神ゝを宮ゝ
ちゝちゝれハ青山ゝ様宋を奏する事ゝハ
主ゝの降ゝ降ゝ叶（り悪ゝ鬼の侵ゝを
和ゝ人様宋の名ゝと腐解ゝして経法を
あゝ宮ゝちゝあゝ法ゝ法ゝ和ゝ代神宋
の度ゝ度ゝ依て神宋侯と称すゝ云ふ石ハ
ゝ川せの花ゝ葉ゝ
ちゝ度きゝかゝきゝかゝくゝとゝいふハ神宋の字
山の口侯れて又（ちゝ度ゝ侯ゝと書と欲の

物語ることいふて能くこれと同じ意味なり
萬葉集の中に小倉山と書てあるも
りくとよませたる歌ハ倉山のまかく
らくハ神楽のまなくらくハ倉山のまかく

再命七月十五日恒例施餓鬼

方丈漢書序初学見少於流者集序して
施餓鬼の法会を修する事七月十五日の盂蘭
魂祭ハ八月蓮池者悲母陳鬼の苦患を救ひ
しより起れり法華経を作ひ聖ちれハ
今更いふまでもなく元三千万億の世界仏菩の流
布する慶悲陳行せりといふもなし詳て
亦神国の魂祭を考ふれハ其由て来るを久

遠なり人王第二代
後靖天王十一年春天下疫癘隔行せしかハ
天皇祈り奉りて三柱の大社に授け玉ひしに
大神託して曰ふ十月晦日父祖男祖ホの魂共
息ちり来て子孫の家に隠む子孫ちを見ハ
同く人家に隠む奠供を捧ぐる故に毒気と
毒風を吹せて此疫癘を病しむ流行の災
といふんとも去かしと思ふ故に
下して父祖親者及ひ流行の魂を鎮
む夫父祖の霊奠を受て子孫の家に来るときハ
設ひ疫癘を隠すとも流行
思ちと雖ちんとなく疫癘を変ちて
況神明の命ちを奉ちの勅ちを

いて 扶桑略記 廿三年の魂祭ハ佛教東漸の後ハ
七月の盆祭を主とし勅使を遣はして厳
れ行なはしめ給ふ冥界のさまハ一切苦
と宣て極月晦夜佛前に供ふ又内魂祭とて
博食を調ひ聖帝の月の勅旨仏前に供ス
光其道風なりと雖も七月の盆祭りと
朝に勤るとハ八幡の神託より始まるなれハ
其を人し惜むもし天皇支那より起るとも
見えたり人王十三代 持統天皇の御宇
七月一日に先皇義の宣旨を蒙く天下に行ふ
其法云人生る父母の苦難を脱ひ生前
死して鬼となる其苦患を救て安んハ
義を立ずしていたん空しかるべ

洋に鬼神の境界を知り人命尊ひに 仏経云 吉
重大重の法を行ふ神代黄泉の事に遠
き人敬に先を同ふに先祖氏をして孝道
を尊ましむ世に門の孝ハ父の威を
の孝に吉の孝にあり仏教に孝を尽
さず人ハ何の欲ふ吉と云人朝に先を先とし
業て十五日のみ自恣の日を設て多者ハ朝より
一文を高ひ夕より一銭を設けて先を盆供の
に為て花せる親を勝て
する己の罪を惜む其人を道と人此宣旨ハ
遠国に終て い初め国司に宣し此日に至て
先を先しむと云 扶桑略記又云十五日 天皇
大西殿に幸して盆の節会を行ひ給ふ

百済僧尼に向く陪り堂を度して始て百済五経
博士を請ひ法伝を天竜地獄に借者
並て堂を度て度下に設け一切の神祇吳令を使ひ
世間迷倒の神祇を除鬼と荒霊と人魂と
に供者に服従家族
陪孫を群臣に勅ふ　天皇初め臣の奴婢を
朝廷に陪す度ものを荒撥大神に問
ふる大神形を見し意訳勅し　恵訳勅し　荒代
泊を快しなるとの事這ふ八偽もなく等も
なく至れる事極れる事列して八人間
教道の極を説し父を教ひ母を教ふの家家
至て正に至る吾神是未言孔子ホ吳重もなく
所へ八道に大小あり別答度神あり度

人代量の人魂畏とちる魅とちる事神に
ふ限りあり　事を行ふ度に怒て疫
鬼とちる災物とちる疫を国に満て害を
人とちる食を行ふる度に悪て元魔炎魅
とちる別人の精を奪ひ田のみのりを盗む飢年
渦星を由て行ちる　天皇今盟供を除
し万民もちる星を除す国の邪気を除く仏人
し万民を救し除行する人あり八元大神
星とちる眷属の神星を使ひ疫八巳に福し
あるひ子孫に福し三代を過さし是遠八
仏令下に順ひ近八皇令に随ふ依て
ちる若遠者し晩の慢りて押棄る人あり八
元大神星を罰し眷属の神星を去疫八

已上進じ或は子孫に進じ五代を過さゞる遠は
仏命天命に背き近は宮人命家命に殺けは
之亦世を虛妄なる後世苦に真数を記して
世を知る愚しき人に依て敬て家を禁中
行ふと以り此神託を以て天下は盗賊を京国に於て
勅使を立て仏法に順ふのみなる又神社の
命令れは上　天子より下庶民に至られ
富と貴に傾して忽に亡ぶなり宮
神用の宝職に預れは祈祷也宮人を
屋に是を勅ふは立て交社叡族の極苦を助て
其巡視を取もるのみなる仏命天命
を立て神勅に随ひ奉れは仏神に敵
奉して擯棄を立れ一家眷属に至て子孫

繁昌なるを以は是を為て沸に世を
立て交社叡族の意を是れたるのみなる
仏神の命を背て是れ
貧窮短命の報ひを招く百年紙文東
方此の世三年に風雨時を違て五穀みの
ず大旱供水かてるに至て疫病疫疫時
行なるも是を法人に
三度不義にして仏神
三宝の冥意に背き者は是れ平
生人に勝て交社叡族の子孫を汚す仏神
三宝の冥意を安き人に事行要家刑
仏刑して真言を法皇に依て祭れ
一宝の食一花一香の微物なりとも善く
三世一切の三宝を供養れ一十方法界の鬼

悲絶流し給て六道四生の群類を救益
する大利あり州七月十五日より限り法尋常ムな
る日くれて根部むなる年也ともかの元先祖
なる父祖書るゝ本の事果とゝ又ハ物の熟孔雲
ゝの宗りをやもゝゝ生活よしくゝなり
生家のゝよりても其異活ハ節先ゝもゝれハ
ムよりゝん者い傳て傳ゝ傳ゝ

大日本国長谷寺観世音縁起和讃

五帝時代

恵日破暗
青明法世間
能仏政能政観世音
大慈大悲の月影ハ
さしもかしこき仏弟
立ゝ知ゝよ伊元しゝて
流生を摂受しゝひと
最迦保ゝくゝれハ
摂取世ゝふ天ゝゝ
助をゝひしゝ喜倒し
演の言葉の数ゝゝ
同ゝ大悲の仏ゝて
雲能解ゝゝ説ゝふ
そゝれを宗ゝ尋れハ
天陽神の門教筆
縁起秘記の二巻也
能記流記ゝを喜の
古記ゝ具ゝ生ゝゝ

其大分を以て
博愛無常の地に照す
一切法佛の右和なり
河の東は大泊瀬
西は金剛界なり
主城の他に諸国の
十方世界の仏菩薩
堂塔集会の形なり
中に大慈大悲
観世音
三世常住法界乃
利生乃長久なれば
それは大悲の形像也

光仏山は厚部の
三世常住無量寿
大日如来の降ち
胎蔵界の万菜なり
小泊瀬山と見るは
仏伯集り給ふ
法天神伯竜鬼
大日如来諸仏乃
眷属なる天龍八部
金剛宝珠なる
龍王と帰を明白
長谷寺と八名付たる
伽藍也なり

神代の古き昔
立人の神宗旨八乙女は
布留山乃麓乃中
太神これを指さして
此乃地
永く此地に止まって
是を山を開くとなり
今神勅蒙りて
国家を守り福ひす
所と長谷を定れて
長谷山口の社とは
神手殿の尻也
この由とこを作られ

神代の古き昔
天照太神茲地に
神楽を奏色照見に
陽気放つ度毎に
太力祇
汝乃係の御方
人の代に成
代目伊
すなわち
歌裏玉史や定式
宮殿物語
代太力祇の社
祝言業のかくらく

泊瀬女はかの八乙女を
遣はし田舎より流れるハ
五人の神乎祇八乙女より
泊瀬といふる其縁ハ
三社権現人王乃
地主の神玉作先世
三神と称し乗りし
三社の船を安置せ
雷神取て上るとき
先神川の底より泊瀬
天徳地蔵の場ちれハ
旧の三神神川を
時を経し宮殿を
ちらせといふる家也乃
これを見ひの岐ちん
除きいそれの有とかや
先川上より能の義
姫先の所代ら流先脇
川を神川里の名を
意神天皇仮天の日
天人降遣の昆沙門を
所より乃宮殿義隆れ
武内宿禰を入て
先地行来者(ハ)
豊山泊瀬と改先て
小乃殿ちも納先ら

彼雷神を祠ちを
宮殿泊らし瀬の石ハ
ちらちらせハ其古跡
とちせちも又ちらせとも
同し姫先の所時ら
ちらせの窟をしらる
其三の所代より上野や
顕れ出ちせ玉ひ
人王三十代の代
笠之雲之根より
問せ玉ひ皇太子
先陽あらと其ら
太子殿を廣隆ら
今彦神乃宮といふ
泊瀬石ちも根ら生
ちらぬ有ちかりちら
初欲ちも流ちむ
彼の武神の元場彦
名を聞て神居れ
祭石播行権現と
ち地八方道能化
推古天皇行事より八
重徳太子に何有と
大重権化の崩ちれハ
天皇陽玉の出製あら
右先二仰具ち

大成經に載せる所
錦明帝の御宇とあや
白が義と以て何れ
何れ陀羅尼経より初まり
法仏集会の重地と
なりの所隔絶して
まる〳〵尋ね求むれば
住人もなき山中に
真の所まで為補をなし
十一面観世音
刻造り頂く曼荼羅
仏の観音を造立
彩の数力福徳の果

人王三十五の代
伝懐国の更科に
二観の造像と
大和国の長谷寺に
かしこに仏を
法の果の先と為りて
更に仏を造り
光を放つ慶あれ
一夜の間に七身の
感見しより不可思議の
五尊長者と世に呼れ
彩長谷寺と号け
観音義侍の接渡や

子命の後の今も尚
天武天皇吉野山に
天住に殿八寺を立
彩塑を造り安置し
江浦寺道明大徳に
釈迦を安置金銅に
大和国の釈迦堂と
観音大士造立す
橘廣岡の生れて
明星天子天降り
受て生まる長月の
幼と申し父母に
二観の造像を訪ね
霊験あらたなる
霊感を受て
仏を作り崇敬人と
なし一宇建完せば
江浦寺道明大徳に
釈迦を安置して
薄を敷て安置し
世に名高く呼れ少録
市聖徳道上人を
田の観音の夏の中
日に花の如しと
中の八日に誕れ
永き決れを悲み
出家の心発起して

宮世の縁に訪れて
道明大德成師に
芸の技に加へ玉ふ
勅の命に八月を
廣の樹を相並へ
下化衆生の誓願
一点一天を双へ
度く衆生を度さへと
光り輝く廣の
丹人陽に立す時
奇瑞天に重神顕れて
天照神の勅を奉
ふ加祇の命を利
比叡谷を詢ね
齢九の花ころも
学ひの道に八重を
幸を累ね八重を
上求菩提の山高く
四方四神来集
乗比叡山寺を立
御気を比叡の
日に高く光り勅
光の如く吉人乃
比叡に降る乗ハ
御の事を松の下
古へ天照太神

天の岩戸を開き
比叡山の地を秘し
朝廷出家を望ませ
仏法僧を率ひつれ
密教の花を咲し
度のうてくなりし時
衆徒数世と果さ
比叡の其頃力に引れて
天照神の出家を
早く仏像彫刻し
其ゝ出家と共に
比叡の衣を求め
神の出を顕して
流れに道明を招て
奇しき霊木に立
天形の神人数を

主人の童子蓋を持
白衣の翁立し給
ふ人何人何方よ
家よハ住と問給ハ
比叡山麓の三尾の神
比叡山麓の三尾の神
比叡山麓の三尾の神
蓋を度て神達ハ
比叡山の清水に
霊木依て降れり
怪む形節差合せ
陽の差すとの如く
童人雪を払ひて
名をあふミの三尾の谷
十丈ばかりの樹とかや
矢奇遇に蓋しなり

樹下ふたる木の本に
翁ハ何人何方よ
京ハ白髭三尾の神
比叡山麓の三尾の神
蓋を度て神達ハ
比叡山の清水に
霊木依て降れり
怪む形節差合せ
陽の差すとの如く
童人雪を払ひて
名をあふミの三尾の谷
十丈ばかりの樹とかや
矢奇遇に蓋しなり
一時天人天降り

白き蓮花を本に敷
本より心白蓮生し
彼谷の名と成り
継代事の四代とかや
比叡山自然と流れ出
代々千に出あれハ
ふを解れ裸を人ち
用明天皇元年
仏の四衣本に生ぜ
木の枝に死せし
推古天皇ろしめす
仏法法発といひし僧
高麻の村に来接す

其比比叡山に来てのち
今に伊(て)白蓮花
人王九七代乃
雷電風雨の借水に
大津の里に出て
忽ちに照むとして
七十年を経ける
蓮国八木の里の人
元ハて八木に移り
かくて三十餘年有
九六年崩乃年
十一面観世音菩薩
ふれ歌を遂きれ

法人不祥の事と思ひ
この伯耆国引寄り
三十九年と云ふ事有
り其を告て云ふ
百人急き天照
五十狭の川上稚の宮
文武天皇十年の
蒼天より雷雨
社の森に忽然
十一面観音金色の
百人拝伏礼し
大願すると陽炎す
所姿を拝まんと

天智天皇七年に
拝置て今年に
百人深夏木少し
故光放ひよ〳〵有
神の古地拝みて
百日籠り陽ると
長月中の五日の夜
月光更にいさきよき
日暮頭れ其中に
光を放て立ふ
古地の霊験礼し
帝くい密迹乃
思ひ凝せい者なる

美き婦人頭れて
よく我が言を思へ
大日日霊観音の
形を現ぜ給ひ
左右すれば仏像と
草に仏神三宝の
霊に東の顔の上
奇き人あり三体ハ
陽木彼こに安揚て
養老四年二月に
度を授ける者を焼き
百民に繁昌し
利益せんとの仏像を

咲を含みあるかに
我古秘密大日霊
七言六句の偈頌を説
百人男女ども帰り
雖造すべき資なし
冥助を祈ると思ひ
三の体かやうの利
三世の利益と示す也
仏を造れと告ふ
教に任せ事あるて
百朝信安祈し
乃至法界平等に
造立安置の我願ひ

大悪の仏教に叶はハ
たゝせ給へと一人に
宣ふ事なく諸の事
天に央ふる例かや
全八年文月に
斑田の勅使勅答を
分入初は事をきく
庵に立寄仏前に
問に答て仰へきく
京の朝侵す謀略
法性高き思議し
仏と我と天降り
彼七の方生を利すへしと
二神見を知きて
彼二神の授をを法

天地日月の未絶す
天地長き安国や
真実度を家に有へし
否泰に依るへき法之
世に繁栄するちるは
古意具に諸すれハ
我国の傳 そ
たゝし度賞の事あるハ
賞して帰る祖ちゝ
自所ハ嬬るを聞きく
大義大悪不可思議の
人王四十五の代
神泉六年良度を

両宗所に合せや
授元玉へハ仏法の
五宗の豊表仏法の
きれハ五宗と仏法と
永く方生を利すへしと
大臣感んゆりて
君をかし法を
帝に奏し資助せんと
彼君位に帰むハ
平氏の長者ちゝあれハ
冥加を感し奏聞し
更武天皇所願ニし
撰三千部月八日に

道慈律師勅を奉
それより三日の中
門長け二丈六尺の
仏像を造り奉れり
刻み終りて二日めに
新しき山に入
六臂の地蔵大菩薩
不空羂索観世音
また仏を刻み
形と等しい百人も
近つきえない仏師
武蔵国の門出地蔵
三の門長け門広し

仏衣木のかたを訪ねて
誓文會誓主聰二仏工
十一面観世音
造り奉る不思議
吉野の陣丸といつる矢
入れいおやしや誓文會ハ
又誓主聰を祀り入れハ
古れも六臂に繋をそ
陣丸をとりて
遠に捨てたまふ
宮に三日第一の
不空羂索大士
天児屋根の出地蔵

門地蔵菩薩なり
君臣の義を主る
天照神の出地蔵
それハ三日と天照
君と臣との道直に
除きいそれの者とかや
大日本の国の名ハ
頃ハの四門を照す
此御子ハ出る門
日出の山にいるなり
仏像ハ
豊饒なると敷物の
仏に陣丸を帰り

三日目神かしこくも
九夫に変化門釈迦
化り玉つる仏なり
女服を安置
出地蔵孫不二の理
此等の理きくときハ
化仏なり車をこそ
日遍照す太神も
大泊瀬の出の名を
なつせの宮人昔より
安らや朝日の出るとハ
道に入つる出なり
家に帰る時天に帰

京ホハ天のちや根の神
海ばやすく二神の
ちく喰とる夢のて
其作常に笑らて
七日を過て其屍
重く其後山口乃
かれら衣服を脱て
見よう人も知ちる
御宝建んと思ともも
いうハせんと歎きて
中ての月も傾る比
金神枕れ指さして
あの地の中に天然と

武雷雄の二神ちく
中地とてる所石抽て
陳ル忽身中かゝぬ
顔色せるる如くちる
仍地ちく矣ちる刈
社に消て社既ちて
多力雄の化身とを
ちる沈る明剣し
ちて験雄雄し
天平元年八月乃
中ちむ笑に一人の
重く来ふちかれ
金剛宝の敬石あら

徒を獅子と寺に
大雨車軸を流して
目かゝやく電乃
窟よりを矢ハ可畏しき
雲を揮き山を振る
夜明て見れハ北の油
谷横横四等八天の
石の面ル平にて
穴あかゝと彫ちる
竜屋の遠もちるる
勝王世に出ふにハ
雷神天に振ふにハ
竜の尾一すてる所ハ

笑笑見れハ天は風
山崩石徒音しる
光に世の遠ちる
天竜八部威を振ひ
慄れ谷に窟も崩る
平地となて中心に
金剛宝石顕れぬ
芝蘭大士の里の孫
仏の出に比ふる
重く敬し拝て
陽然おに枕ち
電光必かゝやく刈
大小星ち知ぬ

霊場交参詣ちく
化山より移れし長く
三宮法天神明の
観音大士の尊像を
房前大臣勅をうけ
五月九日を吉辰と
奏し十完服借養首
元真大安法陳寺
弐是大徒児頭さう
僧ろ色の雲起り
天人降ちる花ふり
法華堂に西方の
真ん夜より至ってかるの

第て拝をちゑ者山の
流生を度く救をを
指南ょ任せ奉刈
宮殿石の上より立
天平五年一面の年
法師を拝ケ寄ちを
講仏百口真海寺
行基菩薩導師を
門より仏の御頭より
そひて空より降めれハ
流仏の数ちる異中し
屋をよりよりさらに
眉ろ人を救ちつ

一夜のろ山の内
男綾道俗親たり
法花命傷より大安寺の
昔を今ようつし修の
伝人行を沿しる
者より八人徒道乃
京ハハ人むらしちる
一度北地より入者を
極楽浄土送ってし
たと伝行深くちる
男猛精進ちるしん
能ちて行ちるあるは
魔焼病患憂悲苦照

堅金色より変したく
行ちる不思議を拝見し
変して降ちとちるる
筆ちるをあ乃能より
真より白衣金色の
前より化現しいひるハ
宮石ち後の密迹士
生ちか後して来修より
いとんの器より住りの変
力を除てたゆちく
道俗男女群集し
安住業身福智寿や
男を求めを女を求ん

ちよハのものよりあしよ
ゑ法王の使者とちう
聖人もまつ頭しふハ
自由自在の者ちうハ
天下国家と接渡して
若衆寺より一変も
一花一葉を向ても
泥ひ眼耳鼻舌くして
真の菩ゑ代りすミやかゑ
音ゑ色ゑを通ぜし
行基ゑ菩薩ハ程ゑの
ゑ出帰ゑ人ちく
かくて七十六日ゑ

芝薩の慈悲を垂ちハ
ゑ之ゑ随ひよ〳〵人と
衆若加法家就して
神通力をとこ〳〵に
巳悔を保んし特へ
家を選ひゑを合せ
芝薩ゑ徒弟せん者ハ
三年遊ゑ学へき者ちう
十方帰ゑ選ゑんと
虚空ゑ登ゑ矢ゑ
斉帽ゑ伝ん嬢て
百日祈ゑ也ひゑ
為ゑ申の刻ちう

大悲の祝ゑ儀式と
ちゑ京人出来ゑ
八大ちゑの真一人
聖人知れゑや比山ハ
法帰帰ゑ帰ちゑ
一代崩ちくして
星のとくゑ列ちゑ
大悲の利益ゑ帰る
体ゑ比度顕れし
上ハ他除ゑ帰ちゑと
一の枝ハ天竺乃
芝薩ゑ祈下の金剛光
観ちう大士の光ゑて

独股を持たゑ金色の
京ハ青山ゑ儀の神
金剛使者とゑ
都て三世の仏等
芝薩ゑ流の集合ゑ
古郡の法ゑ陸ゑ夜の
長谷の密係くして
月のとくゑ加やゑ刻
金剛宝ゑ三枝ちう
下金帰ゑ来ゑたゑ
秋ゑ成道ゑ
一の枝ハ布陀院の
一乃枝ハ古の山ゑ

今顕れし宝殿へ
龍宮あるて天竺の
八大龍王山龍を
近くハ宝殿山の内
其外天龍八部等
宝殿をかこみ群立
右ニ侍りて大悪者の
宝殿の東西四つを
集り住る所所
大象徒と漬浦して
東北の隅仏寺ハ
日ゝ大小法和の
後の山の北の中ニ

此宝石の左服
江堅池をして行通り
時ハ事て常恒ニ
遠くハ天下を守る
其外の眷属法立ル
八大龍子ハ観音の
流生意化の使者ハ
三百餘ハ仏人の
仏寺日夜護原の
流生ニ廻向して一ツ
陣ニ平の地あり
宝石ハ後の知ル
ハ一十六丈乃

堅水精の境界
七仏の舎利納めたり
此境内ニ納むへし
福田ハ事勿へし
四方に四天の四天王
不動八要魔を降伏
天流八法仏僧護し
一山の中一ツ
秘密荘厳清浄ハ
一瞬一礼ハ天
二利を得ると告ふ
此夫様見せまけと
引延慶この霊場を

過去の子仏現生の
未来の法仏の舎利也又
見聞浮提中一の
此宝殿と宝石の
新歌眷属並ハたり
嶺の下ニ立ハ
嶺の上ニ群れ
要流生ハ如来ハ
群仏寂定微妙の地
永く要数を遠離して
不門行基願くハ
御ハ上人を
巡礼せ申ひし

異流長形し
後の山を登りてハ
十六丈の宝塔と
尋て見へ光明
者と云て光ハさしも
金殿玉楼の三摩地と
真空に入りたまひハ
五部の法門百万の
陀羅尼を唱給き
後に至り飄然と中
空の飛迦礼の
七ツの巻に綴りて
一と奏し上られハ

對面問答せられ
極服をんと世を窮ち
法佛の舎利を拝せむ
秘密莊厳閻浮檀ハ
内服乃ふ事ちゝ
入せもひと云ふ
山門秘密莊厳
海會の姿唐土也
其九ゝ世ゝ大悲会の
事ハ門外もひ
次ゆ具ゝ記録して
百日間して朝廷ゝ
事を奏聞限りなく

仏度造立すしてゝ
更に拝受し給ふ
天平七年棟を上
九月九八日ゝ
芸薩行基師を
其日の奇瑞一ツに
紫雲虚空ゝ
鶴姫の音楽洞て
群集の男女人々
ゝれゝ重拝
一天帰敬し
更事仕て後
乗月中旬陽幸し

白後茅場場ゝ
上下の法人を勧進し
同く十九ゝの年の
供養の法会天皇の
行基菩薩吹願
天音会場ゝ
天の乙女ゝ天下り
花を雨して供養せり
茅野戒せ天皇
孫後玉家の道場
四海利益を
天平勝宝元年五年
乗月中旬陽幸し

宣旨王位大臣の
供養の夜原芳の中
玉景の宣旨行逢て
濁世の穢き邪教を
永去の苦くと知きて
流生と利せんと思
早く我が身を寄一と
吉祥と勅一宣旨と
夫化仏蓋建立ハ
三世法仏説法所
三界信却も初きく
天魔外道の悪邪ゆ
去かのきちく人草創の
仏宮なる仏殿
大士光明赫奕也
法皇と生の玉くく
初を修すハ女人
女化と仏し末代の
願家と立てハ家かこ
法皇聖を大仏言
綿帳抵きて玉
只尋常の業ちく
女郎秘密法人の他
かを人くれぬ仏去
怖れ退く堂地ち
去願法道を人

法起菩薩の垂化
観音大士の化仏之
行基菩薩ハ久弥師梨
伝忍菩提ハ普賢菩薩
大日女の国の
授宝法神のちきく
吉日明神聖行の
観世菩薩陸と西宝
宮殿供養一ちく
若巧方便をすれ
霊験堂建ちく人
豊妖怪開と充怪れ
威法を施一ちれハ
檀越聖武皇帝ハ
女ち冥眼一ちな
仏度供養天王乃
光宝の聖去集
天照神の女の他
金剛宝光を願
大日重の女仏
大日女の女ちし
末世の流生を救
人心業ル乃ちれぬ
利益と願く仏
度ちし祈乃
仏事務一仏ちを

宗教学もむ事とも侍
恭敬供養し宜をかし
法界海よ仰すれハ
永ハいかるるさかるとハき
生身仏の教ゑよ
人心ゑふもるひとき
信男ハ安既と重
あるてるとあるゑ恐さハ
かくはるき仏仏よ
いるてうあるとてうせ
うきせの者よ迷ひて
行れの知ようかるかくは
花咲門とあふ(きて

只用ゑ朝教ゑれす
実ゑ志のの日月ハ
遠近備てハちれも
思日のゑよせれ為て
あひるのとちた
とちゑ必ゑかゑれ
粗砂塵数の仏ゑ
歎きてか(らぬ悔を事
位道するふのうれさハ
陸の者も数かて
芸陸の持ようと粗ゑんハ
陸ゑの森やらとんけの
人をひせゑん一すちよ

願む仏の仏よの系
悲作成雷震 導き玉(今世後世
附耳霊法雨 慈意妙大雲
南無大慈大悲十一面観世音菩薩 滅除煩悩焔
南無大政威徳天揚大自在天神
天照皇太神告徳道上人曰
我本秘密大日尊 大日日輪観世音
観音應化日天子 日天権迹名日神
世界能救大慈心 所以示現観世音

ちゑ川貫山ゑ強ゑしかけて
ちゑ月をとりふのさゑ免や
羅川すの乃人

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan